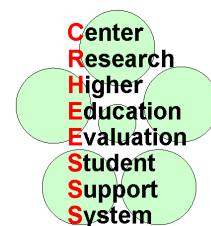


週刊センターニュース

No.329



第329号(2010年10月18日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

〇〇〇 平成22年度第2回カリキュラム研究会のご案内 〇〇〇

テーマ: 共通教育特設プログラムにおける環境・ESD科目のパッケージ化について(第2回)

日時: 10月21日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

担当: 鈴木克徳(環境保全センター教授)、西山宣昭(大学教育開発・支援センター教授)

趣旨: 第2期中期計画【3-1】および【4-3】の22年度計画に環境・ESDに関わる既存の共通教育科目群の体系化を図るとともに、新規科目の開発も行うことが掲げられている。これらの計画については、共通教育委員会下のWGおよびカリキュラム検討委員会でその実現に向けて作業が進められている。この研究会では、第1回に続き、上記WGで検討中の環境・ESD科目のパッケージ化案について授業担当者を交えて議論する。今回は、まず、他大学の事例について鈴木克徳教授に紹介していただき、今後の継続的なパッケージおよび教育内容の改善の参考にするために情報を参加者間で共有する。さらに、パッケージ案の最終確認を行うとともに、パッケージ全体の教育目標について公開で議論したい。

〇〇〇 大学コンソーシアム京都 第8回SDフォーラム

—「協働」から生まれる職員の能力開発— に参加して 〇〇〇

10月17日(日)に開催された大学コンソーシアム京都第8回SDフォーラムに参加してきた。今回のテーマは、「『協働』から生まれる職員の能力開発」であった。

第1部では、横田利久氏(中央大学横浜山手経営再生室担当部長・大学行政管理学会前会長)から「『協働』が職員力を高め大学を元気にする」と題して、基調講演が行われた。

『IDE 現代の高等教育』8-9月号「プロとしての大学職員」掲載の加藤毅氏の論考「大学職員のプロフェッショナル化に向けて」を取り上げ、自らがいわゆる第一世代の端くれとして、若い世代にメッセージを送る思いで話をしたいとの前置きがあった。

まず、「私のしごと・職業体験」として、自らの経歴を披露しながら、そこで培われた職員力について力説され、新たなものへのチャレンジ・熱意を感じ取ることができた。

- 採用当初、職場が暇を持て余す状況にあり、組合活動を通して教職員との交流に努める中で、教員の思考様式や学内の色々な情報に触れる機会に恵まれたこと。
- 経理部に異動し、学費の定率漸増方式を学内教員の反対を押し切り、導入したこと。
- 総合政策学部の設置構想検討の過程の中で、職員として一戦力となれたことを実感し、設置後は新学部ゆえにチャレンジングに学内外にその存在にPRしまわったこと。
- 経理研究所では、公認会計士養成に雇用した専任講師との交流を通して、大学教員以外に下支

えするスタッフの存在意義を認識し、公認会計士合格率増加に大きく貢献したこと。

これらの経験を通して、教職協働以前に職職協働が必要ではないかと説かれた。職員は「空気を読む」習性があり、なかなか冒険をしようとしませんが、熱意をもって職務に取り組むことが大切である。また、改革を内実化し継続性のあるものにするには、教職協働がカギとなるが、教員の基本特性を理解しておくことが大切である。改革のために採用された教員はいないわけであるが、職員にとっては改革への関与こそ大きなチャンスとなる。職員の役割は、教員を改革に関与させ、励ましてその気にさせることである。

教職協働は従来から存在するものであり、そのあり方に変化が生じていることがクローズアップされている原因である。職員は HOW、教員は WHAT から思考が始まり、その違いから生じる衝突こそがよいものを生む起爆剤になるはずである。大学職員の専門性を定義付けるとすれば、マネジメント能力ではないか。最後に、本務以外に、学びのネットワークを確保することで、自己相対化できる大切さを指摘された。

後半の質疑応答では、職員にとって、職位・職階が逃げ場になっていないか。階層構造に依存せずに、責任感をもって職務に当たることも大事ではないかとのコメントがあった。

基調講演全体を通して、職務に対する感性と教員とのコミュニケーション能力が職員の力量形成に不可欠な要素であることが強く感じられた。

第2部の分科会では、林が分科会 A（教職協働の基礎としてのインストラクショナルデザイン）、山代が分科会 F（京都高等教育研究センター「SD 研究」プロジェクトのあゆみ）に参加した。

分科会 A では、日本におけるインストラクショナルデザイン（以下「ID」という）をリードする鈴木克明氏（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻教授）から、ID の概念や時代的ニーズについて説明があった。ID は欧米では歴史のある研究領域であり、学習心理学やシステムのアプローチを基盤にしている。授業設計の職人的・経験的・個別的アプローチから科学的・工学的・普遍のアプローチへの転換により、ID が急激に脚光を浴びようになってきた。

鈴木氏が専攻長を務める教授システム学専攻では、多くの大学職員や企業関係者が e ラーニングを通して ID を学んでおり、「科目オリエンテーション VOD 作成」、「ARCS モデルを活用した教員の動機付け」、「ジェネラル・スキル科目の体系化」など、実践的なテーマ研究が行われている。大学職員が ID の知識・スキルを学修することによって、カリキュラム構成の場面における教職協働が今後期待できそうである。なお、アメリカでは、ID 関係の専門職は、専門教育に特化した教育設計に貢献している場合が多いとのコメントがあった。

分科会 F では、前半は、山崎その氏（京都外国語大学学長事務室室長）から、「京都高等教育研究センター『SD 研究』プロジェクトのあゆみ」と題して、5年間の「SD 研究」プロジェクトについて報告があった。職場環境が多様化している中、専任職員には、通常業務マネジメント並びに非専任職員へのマネジメント能力が求められていること、また、増加している非専任職員に対しての SD の必要性が述べられた。

後半は、ワールドカフェという手法により、分科会参加者全員が、SD についての自分の考えについて意見交換をする場が設けられた。他大学の参加者の意見を聞くことができ有益であったが、教職協働の推進等、SD を組織的に行っていくことの難しさを感じた。

（文責：センター客員研究員、北陸先端科学技術大学院大学 林 透、
学務課教務係長 山代 隆章）